

なかま



プリンストン日本語学校

平成27年度 No.26

平成27年11月15日

文責 荒川雄之 arakawa@pcjjs.org



プリンストン日本語学校の皆様へ お礼に代えて

カルダー淑子

(プリンストン日本語学校理事)

このたびの旭日単光章の受章については校内の皆様から温かいお言葉を頂き、有難うございました。前号の「なかま」で荒川校長先生が受章の意味をお書き下さいましたが、その過分のご紹介には小さくなるばかりです。私がこの章を頂いた理由はアメリカの補習校における継承語教育の普及というものでしたが、その実現の場はまさにプリンストン日本語学校であり、その意味でもこの章は私が全校の皆様とご一緒に頂いたものだと感謝の気持ち一杯です。

ご承知のようにプリンストン日本語学校は多様な背景を持つ生徒への対応を目指し、校内に二つの教育部門と三つのコースを持つ世界でも希な補習校ですが、この制度の立ち上げには創立以来の先輩理事たちの強い信念があり、さらにその実現に向けてたゆまない努力を続けて下さった校内各部門の先生方のご苦勞がありました。継承語コースについては、初代の教育第二部長としてプリンストンコースを8年にわたって主導されたリー季里現理事長をはじめ、小学部の主任として教材開発やカリキュラム作成にご尽力下さった山田敏子先生、中等部に至るコースのカリキュラム開発に大きな貢献をされたモイヤー康子ディレクターを始めとする先生方のたゆまないご苦勞があり、その貢献の上に出来たのが今のプリンストンコースです。2012年からは小野桂子教育第二部長のもとで、更なる努力も続いています。また、高等部については、1990年代の半ばから主任として質の高い授業をご提供下さり、多くの卒業生を輩出された前田文夫先生のお力も特筆すべきことと思います。一方、教育第一部には、こうした本校の教育理念を高く評価し、補習校部を主導するかたわらで、両部門の融和と協調に心を配って下さった歴代の文科省派遣の校長先生がおられ、さらに補習校部はもとより、幼稚部から JASL/ADULT まで、それぞれの立場で全校の子どもたちの成長を見守り、授業の向上に全力を傾けて下さった各部門の先生方がおられます。そしてそれを大きな立場で支えて下さった総務オフィス、財務・事務部門の皆様、さらには学校の教育方針を理解し、惜しみ

ない支援を下さった多くの保護者のお力添えがあったからこそ、多様な生徒に対応する学校の体制は維持されてきたと思います。

この目標を目指してプリンストン日本語学校が大きく成長した10年の間に理事長をさせて頂いたことは私には大きな幸せでしたが、その私の役割はごく限られたものであり、今回頂いた章は、全校の皆様一人一人と共に頂くものだと強く感じています。思い返すと、2000年代の初めにこの二部門三コース制を発足させた時に目標としたのは、校内のすべての生徒がその学習目的と背景に応じて持てる力を最高に発揮し、それぞれが最高の到達点に達する授業を確立することであり、それを全校の申し合わせとしたものでした。プリンストン日本語学校が創立35周年を迎える今、校内の皆様がまた新しい気持ちでこの目標に向かって進んで下さることを心から願っています。

表現学習発表会 ①



先週、表現学習発表会の第一日目が開催されました。18人の生徒たちが、限られた時間の中で練り上げたそれぞれの思い・考えを、少し緊張しながらもしっかりと発表していました。会の冒頭、私からは「私たちの社会は、言葉によって成り立ち、ある意味では言葉の世界そのものでもあります。ある人の発した言葉によって勇気を得たり、あるいは悲しみが増したりもします。それは、言葉の内側に、それを発している人の「思い」が必ずこめられているからです。そして、それらの言葉を受け止める側の人も「言葉」を介して相手の「思い」を受け止めるからです。すなわち、お互いの「思い」をやりとりすることによって、私たちは生きているわけです・・・」という話をしましたが、生徒たちが一所懸命に磨いた思いは、私ならずとも、その場にいた人たちに自然と届いていたことと思います。もちろん、生徒たちの聴く態度も、満点であったことは言うまでもありません。



お知らせ

◇燦々プロジェクト講演会のお知らせ

11月22日 35周年記念、燦々プロジェクト講演会が行われます。

「日本小学校最新教育事情」講師：荒川千里先生講演会というよりも、座談会として実施していく方向ですので、お気軽にご参加ください。

